



インターカー [相談受付]からの 学生・職員相談室のご案内

学生・職員相談室 インターカー (相談受付)
井上 陽子 (いのうえようこ)

蔵本分室のご紹介

この4月から蔵本会館の改築工事が済み、学生・職員相談室蔵本分室が、新しくなりました。相談室は、蔵本会館2階の東奥(階段を昇って左奥)に移り、部屋も広くなり、開室日も昨年10月に週1日(午後 から週2日(終日))に拡大され、より利用していただきやすくなりました。常三島相談室で常駐している2名の専任教員(臨床心理士)が交代で向ういています。気軽に相談してください。

相談室利用案内

昨年度の学生相談室における学生の延べ来談件数は、1,757件で、全学年を通してたくさんの方々に利用してもらっています。相談内容も、修学、進路・就職、人間関係、精神的な悩み、法律関係やハラスメントなど、さまざまな相談を受けています。また、保護者や教職員の方からの相談も受け付けています。

相談室では、専任教員他、各学部の相談員や法律アドバイザー、カウンセラーの先生が相談に応じてくれます。

また、職員相談室は、徳島大学の職員ならどなたでも利用でき、

職場での悩みや人間関係、個人的な悩みなどの相談を受けています。いずれも相談室でお話された内容を了解なしに外部に漏らすことはありません。

インターカー(相談受付)として

このような学生・職員相談室で、私はインターカーとして働いています。インターカーとは、皆様のはじめの窓口になりお話を伺って、専門の先生や部署をご紹介したり、予約をお取りしたりする役割のことを指します。毎日たくさんの方々とお会いし、いつもいろいろと教えてもらったり、考えさせられたり、掛けてもらうことにも癒され元気をもらうこともあります。相談室の扉をはじめたたくのは不安もあるかと思いますが、できるだけ安心してお話してもらえよう、いつも丁寧に皆様を迎えられたらと思います。

困ったことがありましたら、ひとりで悩まず、気軽に相談室の扉をたたいていただければ幸いです。



蔵本分室 入り口

地域貢献

「人体解剖と骨のミュージアム」の 一般公開と解剖学分野の社会貢献活動

2001年から歯学部解剖実習室に多数の解剖標本を準備し、2010年に実習室近くに常設展示室「人体解剖と骨のミュージアム」も設置して医療従事者や医療系学生に公開してきました。今回、学長ならびに学部長裁量経費の支援を受けて「ミュージアム」の拡張と内装整備などを行ったのを機会に、「ミュージアム」を一般にも公開することとしました。

「ミュージアム」には、ヒトの骨標本17点、シリコン含浸内臓標本72点、その他の内臓標本など34点、また解剖模型57点、さらに動物の骨(顎の骨が主)や歯など152点の計332点が展示されています。人体標本の展示にあたっては、日本解剖学会制定の「人体標本の展示に関するガイドライン」に則っています。

人体標本の展示の目的は「人体標本の見学を通して、人体に対する理解を深めてもらうこと」です。医療でのインフォームド・コンセントが適切に行われるためには、患者さん自身にも人体についてよく知っていただくことが必要です。人体については書物などで学ぶことができず、人体の臓器を実際に見学することが、その理解を



動物標本の展示

大きく助けることは言うまでもありません。

動物標本の展示目的は「歯学部の専門分野である顎を導入口として、医療や人体に関心をもってもらう」ことです。最後まで自分の口で食事ができることは、老人の切なる願いの1つです。その基本をなすのが、顎と歯を使って食べ物をかみ砕く機能(咀嚼)です。咀嚼が健康や長寿と深く関わり、また顎の形にも影響を及ぼすことが知られています。動物

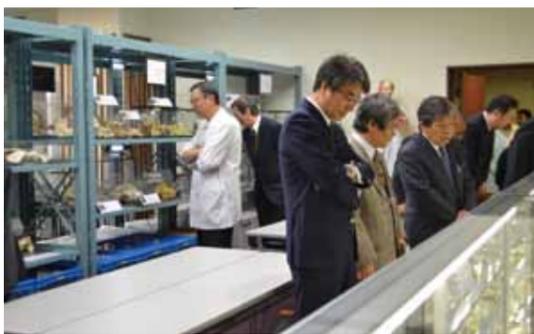
の食生活と顎の形の間連から、咀嚼の重要性を学ぶことができます。解剖実習室でホルマリン液に浸けられた状態の標本216点

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
再生修復歯学部門 顎口腔再建医学講座
口腔顎顔面形態学分野 (歯学系) 教授
北村 清一郎 (きたむらせいちろう)

は、解剖学会のガイドラインに則ってはいますが、一般には公開しません。これらの標本は、歯学部生のみならず、学内外の医療系23教育機関(1学科を1機関として計算)の標本見学実習や、様々な医療職種の卒業講習会などに供され、年1回の2日間は県内外の医療系従事者・学生に広く公開されています。また、毎年多くの医療従事者が、卒後のスキルアップを図るべく、科目等履修生として私の解剖科目を受講しています。このように、解剖学分野は「地域の解剖教育センター」として地域連携・社会貢献活動の一端を担っています。しかし、通常でも教育負担の大きい解剖学分野にとって、このような活動の負担は大きく、様々な工夫でのいではいますが、解剖学教員の熱意だけでは限界があります。こうして築きあげてきた社会貢献活動を継続し、高めていくためには、このような活動に対する、大学全体のさらなる理解が必要と実感しています。



ミュージアム内部



オープニングセレモニー後の見学会